



日本植物バイオテクノロジー学会 会報

Plant Biotechnology Vol.41 No.1 発行のご案内

1

Original Papers

[Metabolic diversity analysis and genome wide assessment of oxalate accumulation in the leaves of rice \(*Oryza sativa*\) cultivars](#)

Atsuko Miyagi, Nobuhiro Tanaka, Matthew Shenton, Kaworu Ebana, Satoshi Ohkubo, Shunsuke Adachi, Taiichiro Ookawa, Maki Kawai-Yamada 1
 イネ (*Oryza sativa*) の葉のシュウ酸蓄積に寄与する因子を特定するため、イネ107品種におけるシュウ酸などの有機酸をCE-MS/MSで測定、比較した。その結果、ジャポニカ型ではアウス型やインディカ型よりもシュウ酸を蓄積する傾向があり、シュウ酸含量とクエン酸含量との間に正の相関が認められた。一方、GWASではシュウ酸蓄積に寄与する遺伝子座は特定できなかった。これは、シュウ酸蓄積に寄与する因子が多く存在するためと考えられる。

[Functional redundancy of R2R3-MYB transcription factors involved in anthocyanin biosynthesis is manifested in anther pigmentation in petunia](#)

Mashiho Yuhazu, Ryoko Hara, Mei Kimura, Akira Kanazawa 9
 ペチュニアを研究対象として、R2R3-MYB転写因子であるPURPLE HAZEをコードする遺伝子を異所的に発現させた形質転換体の解析、ならびに、薬が着色する品種と着色しない品種の比較解析を行った。これらの解析から、薬の着色と関連した遺伝子発現を明らかにすると共に、複数のR2R3-MYB転写因子の間に、薬の着色として顕在化する機能的冗長性が存在することを明らかにした。

[SHOOT GRAVITROPISM 5 mediates the stomatal response to darkness in *Arabidopsis*](#)

Moeca Arai, Keiko Kigoshi, Kosuke Moriwaki, Kyoko Miyashita, Yoshimi Nakano, Sumire Fujiwara 19
 本研究では、シロイヌナズナの転写因子であるSHOOT GRAVITROPISM 5 (SGR5) の機能損失株において、野生型と比較して水分損失が増加することを確認した。また、SGR5はホモログのINDETERMINATE DOMAIN 14とは異なり、ABAシグナル伝達経路において機能しない可能性が示唆された。一方で、SGR5機能損失株の気孔の解析から、SGR5が暗闇により誘導される気孔閉鎖において機能する可能性が見出された。

[Roots applicable, high sensitivity and specificity assay for the detection of *Candidatus Liberibacter asiaticus* in citrus roots and fruits](#)

Zecheng Zhong, Yu Chen, Jinhua Liu, Wei Wang, Feng Zhou, Liu Hu, Jinlian Zhang, Tingsu Chen, Jiyu Xiang, Tingdong Li, Yingbin Wang, Shiyin Zhang, Shengxiang Ge, Jun Zhang, Ningshao Xia 27
 Early diagnosis of citrus huanglongbing (HLB) is crucial for reducing economic losses in the citrus industry. This study has developed a qPCR assay suitable for root samples, providing high sensitivity and specificity, which offer a robust diagnostic tool for early detection of HLB.

[Identification of a novel Golgi-localized putative glycosyltransferase protein in *Arabidopsis thaliana*](#)

Natalia Rzepecka, Yoko Ito, Kei Yura, Emi Ito, Tomohiro Uemura 35
 AtGTLPL (*Arabidopsis thaliana* GlycosylTransferase-Like Protein)は既存の糖転移酵素とアミノ酸配列の類似性を示す機能未知の新規タンパク質である。本研究では、蛍光タンパク質を融合させたAtGTLPLと各種オルガネルマーカーを発現する二重可視化システムを作成し、共焦点レーザー顕微鏡で観察することで、AtGTLPLは主にゴルジ体のトランス槽に局在することを明らかにした。

目次

Plant Biotechnology Vol.41 No.1	
発行のご案内	1
第41回（仙台）大会のご案内	3
「2024年度JSPB国際会議参加奨励金」の募集について	6
第6回産学官協力セミナーのご案内	7
学会からのお知らせ	7
特別賛助会員のご紹介	8

今号のトップ写真

Plant Biotechnology誌最新号の表紙写真から。シロイヌナズナ根細胞におけるAtGTLPLの細胞内局在を示す顕微鏡写真。 [本文はこちら](#)。

会報がパスワード無しで学会ホームページの[会報一覧](#)から読めるようになりました。過去の号もご覧になれます。



Subcellular localization of AtGTLP in Arabidopsis root cells

AtGTLP is a novel trans-Golgi-localized Arabidopsis protein with characteristics of a glycosyltransferase. The micrograph shows root cells after double visualization of Arabidopsis line co-expressing AtGTLP-mGFP and a mRFP-tagged trans-Golgi marker, ST. Subcellular localization was observed using Zeiss LSM980 confocal laser scanning microscope system equipped with Plan-Apochromat 63x/1.40 Oil DIC M27 immersion objective.

Adapted from: [Rzepecka et al. \(pp. 35-44\)](#).

Development of a molecular maker for sex identification in Thai commercial date palm (*Phoenix dactylifera* L.)

Nuttapol Promkaew, Puangpaka Umpunjun, Ngarmnij Chuenboonngarm, Unchera Viboonjun. 45
DNA markers were used to identify sex in date palms, crucial for efficient pollination and resource management. A new SCAR primer pair, mspW18-2F/R, successfully identified male plants with 100% accuracy in KL1 and Barhi cultivars, offering reliable early-stage sex identification.

Drought stress induces early flowering and the stress tolerance of offspring in *Petunia hybrida*

Ngoc-Ha Thi Tran, Duong Van Hoang, Loc Tuong Phan. 53
This study explored effects of water deficit on flowering time and transgenerational impact of *Petunia hybrida*. Severe stress led to early flowering, occurring 5.3 days earlier than the control group. Progeny from stressed parents showed increased drought tolerance. These findings indicate the positive transgenerational effects on offspring.

Molecular cloning and biochemical characterization of indole-3-acetic acid methyltransferase from Japanese star anise (*Illicium anisatum*)

Takao Koeduka, Ako Nakabo, Ami Takata, Ryo Ikeda, Hideyuki Suzuki, Sakihito Kitajima, Shin-ichi Ozaki 65
基部被子植物に属するシキミ (*Illicium anisatum*) からインドール-3-酢酸のカルボキシ基をメチル化する酵素 (IAMT) を単離することに成功した。本酵素はカルボン酸側鎖の鎖長を識別する高い基質特異性を示し、他の植物種から単離されたIAMTとは異なり独自の分子進化を遂げたことが判明した。

Short Communication

Exogenous treatment with N-acetylglutamic acid confers tolerance to heat stress in plants

Takeshi Hirakawa, Seia Tanno, Kazuaki Ohara 71
本研究において、我々は非タンパク質性アミノ酸の一種であるN-アセチルグルタミン酸(NAG)がヒストンアセチル化を伴う高温ストレス応答遺伝子の活性化を通して、シロイヌナズナに熱ストレス耐性を付与することを見出した。NAGによる熱ストレス耐性の付与はイネにおいても確認できたことから、NAGは複数の植物種において熱ストレス耐性強化に利用可能であることが示唆された。

Notes

High β -carotene accumulation in transgenic eggplant fruits grown under artificial light

Ryohei Yamamoto, Seigo Higuchi, Yuji Iwata, Satomi Takeda, Nozomu Koizumi, Kei-ichiro Mishiba 77
本研究では、細菌由来のフィトエン合成酵素遺伝子を果実特異的に発現するプロモーターに連結した外来遺伝子を導入した遺伝子組換えナスのT₁およびT₂世代を人工気象室で栽培し、果実の成長や β -カロテン蓄積に対するHIDやLED照明の影響を調査した。その結果、組換えナス果実の β -カロテン含量は、閉鎖系温室で栽培した果実の約5倍に増加した。一方で β -カロテンが蓄積した果実の重量やサイズは、蓄積していない果実よりも減少する傾向が認められた。

Identification of a di-glucose conjugate of 4-hydroxybenzoic acid in bamboo cells expressing bacterial 4-hydroxycinnamoyl-CoA hydratase/lyase

Naoki Ube, Yasuo Kato, Taiji Nomura 83
細菌由来4-hydroxycinnamoyl-CoA hydratase/lyaseを導入したタケ培養細胞において、4-hydroxybenzoic acid類縁体のモノグルコース結合体に加えて、ジグルコース結合体も高蓄積していることを明らかにした。

日本植物バイオテクノロジー学会第41回大会は、東北大学の中山亨先生を大会実行委員長として、2024年8月30日（金）～9月1日（日）の日程で、東北大学川内北キャンパス（仙台市）にて開催する運びとなります（オンサイト/オンライン-ハイブリッド形式）。本大会では、ポスター発表は行わず、一般発表は全て口頭発表となりますので、シンポジウム、ランチョンセミナーを含め、全ての講演をハイブリッド形式で行います。また、第39回大会から試行している学生優秀発表賞の選考を本年度も行います。大会最終日である9月1日（日）の午後には、市民公開シンポジウムを同キャンパスで開催します。多くの方々のご参加をお待ちしております。

1) 会期：2024年8月30日（金）～9月1日（日）

- 8月29日（木） 代議員総会
- 8月30日（金） 一般講演、シンポジウム
- 8月31日（土） 一般講演、シンポジウム、総会・授賞式・受賞講演、懇親会
- 9月1日（日） 一般講演、シンポジウム、市民公開シンポジウム

2) オンサイト会場

- 東北大学川内北キャンパス
- 所在地：〒980-8576 仙台市青葉区川内41
- アクセス：仙台市地下鉄東西線 川内駅（キャンパス直結）
(<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/>)

3) 開催方式：オンサイト/オンライン-ハイブリッド形式

- 参加のみの場合
オンサイト、オンラインいずれの方式でもご参加いただけます。
- 発表される場合
原則オンサイトでお願いします。オンラインでの視聴は可能です。
※小さなお子さんや要介護者がおられ開催地に来るのが困難な方、海外在住の方などに関しましては、オンライン発表を可能とします。

4) 大会参加登録および講演申込受付期限

- 参加・演題登録受付開始：2024年4月5日（金）
- 演題情報登録締切：2024年5月27日（月）
- 事前参加登録受付締切：2024年7月31日（水）
（7月31日以降も参加申込が可能です。ネームカード・プログラム冊子を事前送付できません）

大会参加に関する詳細な情報は4月5日（金）までに[大会ホームページ](#)に公開します。その後も随時更新しますので、ご確認をお願いいたします。

5) 学生優秀発表賞の選考

一般口頭発表における学生の優秀な発表に対して「日本植物バイオテクノロジー学会学生優秀発表賞」を授与し、これを顕彰します。エントリー資格は、大会で発表を行う高校生、大学生、大学院生です。発表内容に即して複数の審査分野を設定し、発表内容、質疑応答を含むプレゼンテーション能力について、審査分野ごとに複数の審査員（理事、代議員、座長等）の審査に基づいて対象者の10%程度を選出します。学生優秀発表賞に選出された演題並びに発表者は、大会終了後、会報・学会ホームページで公表し、賞状を送付します。講演申込み時にエントリーが必要になりますので、ご注意ください。

6) 託児所の開設

キャンパス内に託児所を設ける予定です。参加登録の際に、利用の有無のアンケートにご協力下さい。（実際の申込は大会ホームページで別途行います。）

7) 懇親会

大会2日目の8月31日に、キャンパス内の川内の杜ダイニングにて懇親会を行います。こちらも奮ってご参加下さい。

8) 参加費

登録区分	大会参加費		懇親会参加費	
	事前登録	当日登録	事前登録	当日登録
一般会員	8,000円	10,000円	7,000円	8,000円
学生会員	3,000円	4,000円	5,000円	6,000円
非会員	15,000円	17,000円	8,000円	9,000円
シニア会員	0円	0円	7,000円	8,000円
名誉会員	0円	0円	7,000円	8,000円
特別賛助会員	0円	0円	7,000円	8,000円

大会実行委員会事務局

東北大学大学院工学研究科内
E-mail:
jspb41_office@grp.tohoku.ac.jp

問い合わせ先

第41回日本植物バイオテクノロジー学会（仙台）大会ヘルプデスク
（株）中西印刷
E-mail: jspb41-desk@nacoss.com

9) シンポジウム

以下の5件のシンポジウムを予定しています（シンポジウムタイトル、講演タイトルは仮のものも含まれます）。

「Global trends of applications and regulations of plant genome editing」

（国際シンポジウム）

オーガナイザー： 江面 浩（筑波大学）、有村 慎一（東京大学）

概要： ゲノム編集技術は正確かつ最小限の変化での効率的な作物育種を可能とするため、今後の変動環境下での人口増に見合う作物生産を行うための救世主の一つと期待されており、遺伝子組換え技術とは異なる社会需要や規制のあり方が検討されている。本シンポジウムでは世界各国・地域での社会需要と規制の現状について各当事者/関係者から総論/各論の最新情報を紹介していただきつつ、世界の潮流と日本のとるべき未来について議論を行う。

講演者：

立川 雅司（名古屋大学）「Global Trends and Future Challenges in Regulations Concerning Genome-Edited Crops」

笠井 美恵子（American Seed Trade Association）「Global Trends and Future Challenges in the Practical Application of Genome-Edited Crops」

Pankaj Bhowmik（National Research Council of Canada）「Regulatory and Practical Challenges for Genome-Edited Crops in Canada」

Satya Nugroho（Research Center of Genetic Engineering, BRIN）「Policy and Regulation on Genome-editing crops in the Indonesia」

Petra Jorasch（Euroseeds）「The New Regulatory Policy on Genome Editing in the EU」

江面 浩（筑波大学）「Social Acceptance and Regulatory Challenges for Genome-Edited Crops in Japan」

「難培養植物の再分化技術の開発最前線」

オーガナイザー： 七里 吉彦（森林総合研究所）、安本 周平（大阪大学）

概要： ゲノム編集技術を利用した作物の分子育種が精力的に進められているなか、難培養植物の再分化技術の開発はますます重要性を増している。本シンポジウムでは、再分化に関わる遺伝子や低分子生理活性物質の研究に携わるフロントランナーに登壇してもらい、技術開発にいたる過程やノウハウ、失敗例やコツなど論文ではみえにくい工程や実際について紹介していただき、難培養植物の再分化技術開発の一助となる場としたい。

講演者：

池内 桃子（奈良先端科学技術大学院大学）「シロイヌナズナを用いた器官再生制御メカニズムの解明」

花野 滋（東北大学）「A Novel Shoot Converter Set: ATHB25/REM7は再分化誘導を向上させることができるか？」

井川 智子（千葉大学）「ホルモンフリー培養で組換え細胞の分化を制御する基盤システムの構築」

中塚 貴司（静岡大学）「花卉園芸植物ストックの形質転換までの長い道のり」

梅原 三貴久（東洋大学）「トコンの不定芽形成系を利用した生理活性物質の活性評価」

「植物における有用物質生産とその動向」

オーガナイザー： 三浦 謙治（筑波大学）、平井 優美（理化学研究所）

概要： 本シンポジウムは、持続可能性への貢献を目指したバイオ基盤技術の開発に焦点をあて、植物のもつ特性を活かした有用物質生産の可能性について、世界的な動向の紹介と先端的な研究成果の御講演をいただく。植物をホストとした有用物質生産について多角的に捉え、これらの技術が社会に与える影響や持続可能性への貢献について議論し、本分野の将来展開について議論する場としたい。

講演者：

桑原 明日香（JST-CRDS）「Sustainabilityに貢献しうるバイオ基盤技術開発」

關 光（大阪大学）「ベンサミアナタバコを用いた有用テルペノイド生産：実例と課題」

大西 利幸（静岡大学）「植物に由来する芳香族配糖体の合成生物学的生産システムの構築」

岡澤 敦司（大阪公立大学）「紫外線LEDを用いた芳香族化合物の生産向上一温暖化に伴う果物の着色障害克服」

小山内 崇（明治大学）「微細藻類を用いたカルボン酸生産」

出来島 康方（三菱ケミカル株式会社）「植物を用いた細胞培養向け組換えタンパク質の製法開発の取り組み」

「植物ゲノム情報解析と共有技術の最前線」

オーガナイザー： 中村 保一（国立遺伝学研究所）

概要： 植物バイオテクノロジーの基盤となる情報としてのゲノムの完全解読は昨今ますます大規模化・高速化してきている。その活用に必要な情報として、ゲノム完全決定技術、変異解析、アノテーション構築、データベース構築などについてのそれぞれの分野で活躍する研究者から最新の要素技術やその実装について情報共有していただき、議論する。

講演者： 調整中

「植物細胞農業：植物バイオテクノロジーを活用した細胞性食品の生産」

オーガナイザー： 五十嵐 圭介（東北大学）

概要： 細胞培養技術を活用して、本来は動物や植物から収穫される農産物を特定の細胞を培養することで生産する新しい考え方は細胞農業（Cellular Agriculture）と呼ばれている。植物においては古くから細胞培養技術が盛んに研究されてきており、多くの要素技術の研究蓄積がある。本シンポジウムでは、細胞農業の分野の一端を担う植物細胞農業について、これからどのような方向性で研究開発を進めればいいのかを、具体的な研究事例や事業事例をもとに議論し連携を深めることを目的とする。

講演者：

荻田 信二郎（県立広島大学）「食用植物細胞の細胞農業 ～カメリア属の培養事例」

日渡 祐二（宮城大学）「細胞培養による多糖類生産に向けたイナゴマメゲノム解析」

清水 達也（東京女子医科大学）「藻類由来培養液を用いた動物細胞培養による循環型食料生産システム」

橋詰 寛也（株式会社Kinish）「食品業界における分子農業ビジネスの現状と今後」

羽生 雄毅（インテグリカルチャー(株)）「数千トンスケール細胞培養への道」

杉崎 麻友（日本細胞農業協会）「学際的な細胞農業の社会実装に向けて」

10) 市民公開シンポジウム

日時： 2024年9月1日（日）、13時30分～

会場： 東北大学川内北キャンパス（ハイブリッド）

テーマ：

「植物の不思議とちから:その秘密を探り、活かす、さまざまな眼(め)と技(わざ)」

講演者：

渡辺 正夫（東北大学）「植物はどうやって他者と自分を見分けるのか?(仮題)」

青木 裕一（東北大学）「植物と微生物の力を使って地球を冷やす(仮題)」

金子 俊郎（東北大学）「プラズマを利用して植物を病気に強くする(仮題)」

山崎 真巳（千葉大学）「薬をつくる植物(仮題)」

藤原 すみれ（産総研）「スーパー植物をつくる(仮題)」

11) ランチョンセミナー

これまでに2件のランチョンセミナーが企画されています（企画タイトル、講演タイトルは仮のものも含まれます）。企画は今後も募集します。

「キャリアの様々な形」

オーガナイザー： キャリア支援・男女共同参画委員会（委員長：三浦謙治（筑波大学））

概要： 本学会は男女共同参画・キャリア支援の推進に取り組んでおります。これまで、アカデミア、企業などの各方面でご活躍の先生方をお招きし、研究生活やライフスタイルについてのご講演を通じて、若手研究者のキャリアパスの考察の一助となる活動を行ってきました。こうしたなかで、世の中の多様性が求められていると同様、本分野においても多様性が求められる時代になってきました。本ランチョンセミナーでは、アカデミアに所属しながら起業をされた経験のお話や、クラウドファンディングと研究者とのあり方といった観点で話題提供をしていただきます。キャリアパスの多様な形について考える機会になればと思います。

講演者：

小山内 崇（明治大学/シアノロジー）「年収1000万円のポストクを生み出せるか？」

柴藤 亮介（アカデミスト株式会社）「学術系クラウドファンディングサイト「academist」の10年史」

第42回大会について

第42回大会（2025年）は神戸大学・水谷正治先生を大会実行委員長として開催予定です。ご協力いただきます先生方に深く感謝申し上げます。

「Plant Biotechnology誌への投稿のコツ」（仮題）

オーガナイザー： Plant Biotechnology編集委員会（委員長 梅田 正明（奈良先端大））

概要： 近々開設されるジャーナル独自のホームページについて紹介するとともに、論文投稿に関わるメリットや注意点の説明、様々な疑問にお答えするパネルディスカッションなどを予定しています。

講演者： 調整中

大会実行委員長

中山 亨（東北大）

大会実行委員

高橋 征司（東北大）

学会本部からのご案内

◆ 特別賛助会員、賛助会員も大会での発表が可能になりました

2023年9月10日の代議員総会にて「日本植物バイオテクノロジー学会団体会員規程」が改訂になり、特別賛助会員は1口あたり2名までの無料での大会参加(発表を含む)、賛助会員は1口あたり1名の一般会員参加費での大会参加(発表を含む)が可能になりました。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

[日本植物バイオテクノロジー学会団体会員規程](#)

◆ 英語セッションを廃止します

2023年9月10日の代議員総会で学会の国際化について議論しました。そこでの意見を集約し、理事会で検討して、仙台大会より英語セッションを廃止することにしました。英語セッションは第35回（さいたま）大会での日韓中三ヶ国シンポジウムの参加者のために設けたのが始まりですが、近年は発表者数が少なく、また第40回（千葉）大会から口頭発表のスライドは英語表記としたことから、英語セッションの役割はほぼ無くなったと判断しました。学会の国際化については、引き続き議論を継続していきます。

◆ 大会会場に掲示板を設置します

第40回（千葉）大会に引き続き、求人案内および会員間の情報交換のための掲示板を設置します。詳細は後日アナウンスします。どうぞご活用ください。

「2024年度JSPB国際会議参加奨励金」の募集について

日本植物バイオテクノロジー学会（JSPB）では、国際化推進および若手研究者の海外経験の奨励を目的として、2024年度（学会会計年度、2024年7月1日から2025年6月末まで）に開かれる植物バイオテクノロジーに関連する海外国際会議へ参加発表する会員への渡航滞在費用をサポートします。

希望者は下記応募要項を参照の上、[様式A-2024](#)を記入しPDF化したものを2024年4月30日火曜日までにjspb-post@as.bunken.co.jpへ提出してください。その際、メールの件名を「2024JSPB国際会議参加奨励金応募」としてください。

- ・採択人数：1-2名程度
- ・補助金額：上限20万円（一人あたり）
- ・条件：JSPB会員（2023年度と2024年度の会員であること）
帰国後に1,500字程度の参加報告書を執筆（原稿はJSPB会報に掲載予定）
植物バイオテクノロジーに関連する海外国際会議での発表（企業に所属する会員の場合は必須ではない）
重複受給は不可であり、採択後に確認する。
- ・応募締切：2024年4月30日火曜日
- ・決定時期：2024年6月中
- ・応募書類と提出先：[JSPB学会HP](#)から様式A-2024をダウンロード、記入の上、様式をPDF化したものをjspb-post@as.bunken.co.jpへ提出
- ・選考：会長、会長代理、幹事長、国際化委員4名（合計7名）の合議選定推薦後、理事会で決定。
- ・選考方針：大学院学生～学位取得後8年くらいまでの若手を優遇するが、ライフイベントについても考慮する（該当者は応募書類にその旨を記載のこと）。植物バイオテクノロジーに関連する国際会議での参加・発表であること、JSPB学会会員歴、参加歴、CV、発表内容や意欲、応募理由について総合的に判断する。

国際化委員会委員長
有村 慎一（東大）

本学会では、産業界・大学/国研・官公庁の連携を一層推進するために、産学官協力セミナーを年2回開催しております。第6回のセミナーは、「ゲノム編集食品の社会実装について考える（仮）」と題した以下の公開シンポジウムを開催する予定です。ゲノム編集食品は既に実用化例があるものの複数のハードルがあります。ゲノム編集に関する基礎研究に強みのある日本ゲノム編集学会と応用面に強みのある日本植物バイオテクノロジー学会を食のミカタコンソーシアム（「戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）「豊かな食が提供される持続可能なフードチェーンの構築」）が仲立ちするかたちで基礎研究、規制、社会受容の観点から情報提供を行います。参加登録等に関する詳細は追ってご連絡します。

公開シンポジウム：ゲノム編集食品の社会実装について考える（仮）

対象：産学官の研究者、メディア、一般市民等

共催：日本ゲノム編集学会、日本植物バイオテクノロジー学会、食のミカタコンソーシアム

日時：2024年6月20日 9:30～12:30

場所：グランフロント大阪 キャピタルナレッジ 北館 10F RoomB（定員50名）およびZoom配信（定員500名）

- 9:00 現地受付開始
- 9:30 開会/趣旨説明、食のミカタコンソーシアムの紹介
小泉 望（大阪公立大学）
- 9:35 日本植物バイオテクノロジー学会の紹介
矢崎 一史（植物バイオテクノロジー学会会長代理/次期会長候補）
- 9:40 ゲノム編集トマトの開発と上市（仮） 座長：加藤 晃（奈良先端大）
住吉 美奈子（サナテックライフサイエンス）
- 10:10 ゲノム編集食品の届出と残存遺伝子の確認方法（仮）
座長：加藤 晃（奈良先端大）
柴田 識人（国立医薬品食品衛生研究所）
- 11:00 日本ゲノム編集学会の紹介
山本 卓（日本ゲノム編集学会 副会長）
- 11:05 国産ゲノム編集技術の産業利用に向けて（仮）
座長：堀田 秋津（京都大学）
吉見 一人（東京大学）
- 11:35 ゲノム編集食品に関するパーセプションギャップ（仮）
座長：堀田 秋津（京都大学）
山口 夕（大阪公立大学）
- 12:00 閉会/アンケート記入

産学官連携委員会委員長
加藤 晃（奈良先端大）

日本植物バイオテクノロジー学会

〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5
（株）国際文献社内
TEL: 03-6824-9378
FAX: 03-5227-8631
jspb-post@as.bunken.co.jp
ホームページ：
<https://www.jspb.jp/>

2022-2023年度役員

理事

会長

吉田 薫（東大）

会長代理

矢崎 一史（京大）

幹事長

平井 優美（理研）

編集委員長

梅田 正明（奈良先端大）

会計幹事

吉松 嘉代（医薬健栄研）

広報担当

岩瀬 哲（理研）

産学官連携担当

加藤 晃（奈良先端大）

国際化担当

有村 慎一（東大）

男女共同参画・キャリア支援担当

三浦 謙治（筑波大）

庶務担当

神原 圭子（理研）

理事

小泉 望（大阪公立大）

監事

光田 展隆（産総研）

学会からのお知らせ

◆ 次期執行部の紹介

会報12月号でお伝えした通り、2024-2025年度会長候補者の選挙を10～11月に行い、矢崎一史会員が会長候補者に選出されました。次期執行部の予定メンバーは下記の通りです。

会長：矢崎 一史（京大）

会長代理：吉田 薫（東大）

幹事長：庄司 翼（富山大）

編集長：梅田 正明（奈良先端大）

会計：吉松 嘉代（医薬健栄研）

広報：棟方 涼介（京大）

男女共同参画・キャリア支援：三浦 謙治（筑波大）

国際化：有村 慎一（東大）

産学官連携：佐々木 克友（農林水産技術会議事務局兼農産局）

庶務：吉本 尚子（千葉大）

監事：平井 優美（理研）

編集後記

異動のシーズンです。ご所属等に変更のある方は、学会HPの学会資料・会員情報ページ（マイページ）から登録情報の変更をお願いいたします。

（担当：幹事長 平井 優美 [理研・環境資源科学研究センター]）

E-mail: masami.hirai@riken.jp

本会の運営にご協力賜り感謝申し上げます。

- ◆ [\(株\) カネカ](#)
- ◆ [キリンホールディングス \(株\)](#)
- ◆ [クミアイ化学工業 \(株\) 生物科学研究所](#)
- ◆ [グランドグリーン \(株\)](#)
- ◆ [クリムゾンインタラクティブ 英文校正・校閲-エナゴ](#)
- ◆ [コルテバ・アグリサイエンス日本 \(株\)](#)
- ◆ [三栄源エフ・エフ・アイ \(株\)](#)
- ◆ [サントリーグローバルイノベーションセンター \(株\) 研究部](#)
- ◆ [シンジェンタ ジャパン \(株\)](#)
- ◆ [住友化学 \(株\) 健康・農業関連事業研究所](#)
- ◆ [\(株\) 日本医化器械製作所](#)
- ◆ [バイエル クロップサイエンス \(株\)](#)
- ◆ [北海道三井化学 \(株\) ライフサイエンスセンター](#)
- ◆ [\(株\) UniBio](#)